



ありがとう、ロータリアン！ ⑦

福島を、世界に伝えたい



米山学友

ジュ ミソン
朱 美善 さん

出身：韓国

奨学期間：2010 - 12

学校名：東日本国際大学

世話クラブ：いわき勿来RC

2011年3月11日、就職活動中だった私は、春休みで静まりかえった学生寮で一人、1週間後に迫った面接の準備をしていました。午後2時46分、携帯電話が聞いたことのない音で鳴り出しました。慌てて液晶画面をのぞくと「宮城県で大きな地震発生」との表示。「でも、ここは福島県だし」と思った瞬間、ドーンという地響きとともに猛烈な揺れに襲われました。無我夢中で机の下にもぐり、韓国の母に電話をかけながら「お母さん、助けて！ 助けて！」と叫びましたが、うまく通じないまま途中で切れてしまいました。私は恐怖のあまり泣きながら「もう死ぬのかな……」と思いました。

2日後、私たち外国人留学生は大学の計らいで、東京へ避難させてもらいました。世話クラブである、いわき勿来ロータリークラブの鈴木修一郎会長（肩書は当時、以下同）と鈴木雅之幹事は何度も連絡をくれて、「とりあえず帰国した方がいい」と、勧めてくれました。福島原発の事故の影響など、母の心配が頂点に達していたこともあって、私は一時帰国することにしました。

再来日への決意

韓国では連日、日本のニュースにくぎ付けでした。特に、原発事故についてはかなり過剰な報道がなされていました。放射線に関する知識も、福島に原発があることも知らなかった私は、この時点で、ようやく事態の深刻さを認識したのです。

大学からは「5月中旬に新学期を始める」と連絡があり、正直不安でしたが勉強を途中で投げ出したいくない、

卒業だけはしたい、と再来日を決めました。親戚は反対しましたが、両親は黙って送り出してくれました。

日本で寮生活を再開しましたが、頻繁に起きる余震で夜も眠れず、友人を頼って埼玉県に行きました。授業のある時だけ、そこから大学へ通うという生活を2か月ほど続けるうち、「自分は一体、何をやっているのだろうか。地震や原発の恐怖からただ逃げているだけではないか」と思うようになりました。

3年半住んだ福島は、私にとって第二の故郷です。私の心は次第に「ここで復興、復旧に役立ちたい」と思うように変化していきました。大学のゼミの指導教官の励ましもあり、私は福島で就職活動を再開しました。

「日本で就職したい」という私を、両親は今度も許してくれました。韓国では親の言葉は絶対なので、もし反対されたら従わなければなりません。でも両親は、私が自分で決めたことを尊重し、応援してくれました。

福島は私の特別な場所

「なぜ、留学先に福島を選んだの？」とよく聞かれます。いわき市を舞台にした映画「フラガール」が大好きだったこともあります。地方都市には、人と人とのつながりが希薄になりがちな都会にはない、“温かさ”があると思いました。結果として、大学の先生や日本の友達にも恵まれ、米山記念奨学生になってからは世話クラブの皆さんから、娘や孫のようにかわいがっていただきました。



高木カウンセラーの家族と一緒に

日本留学中、思いがけず巻き込まれた東日本大震災、そして原子力発電所の事故。あの日、福島県いわき市の大学にいた米山記念奨学生の朱美善^{ジュミソン}さんは母国へ一時帰国しました。2か月後に再来日した当初は、残りの単位を取り、卒業式を終えたら福島を去るつもりでした。しかし、次第に心境は変化します。福島の本物の姿を世界に発信したいと、この4月から福島放送に就職する朱さん。卒業を前に、心境を伝えてくれました。

た。本当に幸運だったと思います。

カウンセラーの高木孝道さんは、祖父が早く他界してしまった私にとって、初めてできた祖父のような存在です。例会後、会員の事業所に連れて行ってくれたり、自宅で、家族との団欒^{だんらん}に加えてくれたりしました。鈴木会長のお嬢さんは私の姉と同一年で、よく遊びに誘ってくれました。これらの小さな幸せの数々が、いつしか、福島を特別な場所にしてくれたのです。

福島の姿を世界に伝えたい

私はこの4月から、福島放送へ就職することになりました。配属先は営業部です。今年の新卒採用は私だけで、外国人の採用も初めてのことだそうです。採用担当の方に思わず、「本当に私で大丈夫でしょうか？」と言ってしまいましたが、大任を与えられた喜びに、今は身が引き締まる思いです。

もともとは、世界の人々を結ぶホテルという場をつくりたいという夢を持っていましたが、震災を経て、マスメディアの持つ力を実感しました。

今、福島は世界中から“放射能に汚染された危険な地域”という目で見られています。社会に出たら、一人の外交官になった気持ちで、世界中の人々に「福島は危ない場所なんかじゃない。福島は、日本の人々が生きている場所だ」と伝えたいです。外国人の私だからこそ伝

えられることがある、と信じています。もちろん、ただ安心させるのではなく、正しい情報を伝えたい。自分の役割は重要だと感じています。

3月で奨学期間は終わりましたが、会員の皆さんとはこれからも喜びを分かち合い、悲しみを支え合い、困難を助け合う絆を、保ち続けていきたいと思っています。



高木孝道氏から一言

日本語が堪能で、何事にも積極的に参加する前向きな姿勢には感心させられます。韓国のご両親の心中を察すると手放しでは喜ばせんでしたが、朱美善が県内で就職すると聞いた時、正直なところ大変うれしかった。震災と原発事故で苦しむ福島での生活を選択してくれたことに、心から感謝したい。米山記念奨学生として得た交流を生かして、今後も頑張ってもらいたいと願っています。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または“よねやまだより”についてのご意見を、公益財団法人ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。
TEL：03-3434-8681 FAX：03-3578-8281
Eメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp

2013 学年度の奨学生数は 700 人に



理事会で、奨学生採用数減の苦渋の決断

3月6日開催の公益財団法人ロータリー米山記念奨学会理事会にて、2013学年度（2013年4月採用）の奨学生数を、前年度から100人減の700人とすることが決定されました。2005学年度に1,000人から800人に削減して以来、奨学生採用数を削減するのは、8年ぶりです。理事会では、「10人でも20人でも可能な限り、上乘せできないか」などの意見も出され議論されましたが、寄付金状況に見合った採用数として、2013学年度は700人とすることが決議されました。「1人でも多く支援したい」。それが、この事業を支えてくださる多くの方の共通した願いです。全国のロータリアンの皆さまの、より一層のご支援をお願いいたします。